



「上を向いて歩こう」

昨日の朝、永六輔が作詞した「上を向いて歩こう」を心の中で歌いながら城山中学校に向かっていた。私は心の中で改めて歌詞を考えていました。「上を向いて、歩こう。涙がこぼれないように」この歌い出しの歌詞がすてきだなと思いました。「思い出す。春の日、ひとりぼっちの夜」ここまで歌うと歌いだしの涙は悲しみの涙とわかります。楽しかった春の日と今の状況を比較して、今を受け止められない自分がいるのです。作者は、あふれてくる涙を流さないように上を向きます。泣くものかという自分があるのです。寂しい自分を受け止めて素直に泣いてしまったら、すべてを受け止めてしまったら全てが終わってしまうという想いなのかもしれません。また、作者の心の底に、何かあきらめられない気持ちがあったのだとも思えます。

思い出の渦の中、夜道を一人ぼっちで歩きます。

この曲では、今は、まだ手で幸せをつかむことも見ることもできないが、幸せは雲の上に、空の上にあると作者が歌のさびで語ります。「幸せは、雲の上に。幸せは空の上に」と手の届かない向こう側に幸せは必ずあると言い切ります。そして、「悲しみは、星のかげに、悲しみは、月のかげに」と忘れられない悲しみを整理してこの歌は終わります。

秋の朝に自然と「上を向いて歩こう」の歌詞が心に浮かんで、心で歌いながら学校へ歩いていました。ひとりぼっちで……。

私の後ろで、生徒に「先生」と声をかけられて、ハッと我に返りました。「先生、何下を向いて歩いているのですか、元気ないですよ！」と生徒が明るい声で話しかけてきました。「上を向いて歩こう」の歌を下を向いて歩きながら心で歌っていた自分に思わず苦笑してしまいました。

空を見上げると青い空に白い雲が浮かんでいました。



「上を向いて歩こう」

作詞 永六輔

上を向いて歩こう
涙がこぼれないように
思い出す 春の日
一人ぼっちの夜

上を向いて歩こう
にじんだ星をかぞえて
思い出す 夏の日
一人ぼっちの夜

幸せは雲の上に
幸せは空の上に

上を向いて歩こう
涙がこぼれないように
泣きながら歩く
一人ぼっちの夜

悲しみは星のかげに
悲しみは月のかげに

上を向いて歩こう
涙がこぼれないように
泣きながら歩く
一人ぼっちの夜
一人ぼっちの夜